



Instant Stories 1



閑古鳥あくた

使い慣れた箸を動かし、好物をやっつける。

「うめーっ！」

「落ち着いて食べたらどうだ・・・まったく行儀の悪い」

溜息をつく同伴者を一瞥し、言葉も返さずに豚骨ラーメンをすすり込む。

しょうゆも味噌も塩もカレーも食べたし全て好きだが、私はこの味が一番いい。

「ひとつの事に集中しすぎる癖は変わらないな」

「そう思うなら話しかけるのを後にしてくれないかな？」

つれない奴だと肩をすくめ、同伴者はメニューを開いた。

幸せの魔法が記された呪文書のような、きらびやかな表紙をめくる。

鋭い視線が走り、彼女は目的の物を探し当てた。

「大将、ビールを頼む！ それとこの子に餃子を」

「さすがは“博士”！話が分かるッ！」

少し静かにしると私をたしなめるが、その視線は笑っている。

注がれたビールを美味そうに飲み、泡のひげをつけた顔で私を見つめる。

「そんなに見ないでよ。いくら私が可憐でかわいくて美人だからって」

「葱がついている。美人が台無しだな」

「げっ、嘘っ!？」

「嘘だ」

ぶーたれて口を尖らす私を見て更に笑う。気づいたらしく、泡もぬぐった。

「大きくなったな」

「いきなり何さ」

「いろいろな表情を見せるようになった」

「・・・旅してりゃ育つよ。これでも少しは名の通った冒険者なんだよ、私」

そうだったなと笑う。

「なぜ戻ってきたんだ？ 娘よ」

「親に会いたくなくなってはいけませんかね？ お母様」

私の“母”は、優れた魔法生物を作り出す天才魔術師。

「私の、最初の娘。世間は“盗まれたプロトタイプ”などと騒ぎ立てたものだが」

自分の意思で出て行ったことなど、余人に知る余地なし、だ。

私とこの人との秘密。

「よく戻った。会いたかったのだぞ？」

「・・・そう思うなら行動で教えてよ、私は馬鹿だから」

ニヤリと笑ってメニューを指差す。

“ラーメン替え玉承ります、金200にて”

母は笑った。

おかしそうに笑って、私の頭をなでた。

「お帰り、食いしん坊」

雨の夜である。

男は畳んだダンボールを脇に抱え、夜の街を疾走していた。

他の物はすべて捨てた、小さいながらも洒落た家、気に入りのポロ車。

手放したくないと願ったすべて、美しい妻、愛しい娘。

男に後悔はない。

猛然と走り抜け、生活感などまるでない裏通りに入る。

看板の前で止まった。

「重火器・火薬」

二度と目にすることはないと思っていたその下をくぐる。

「拳銃をくれ。早撃ちができるやつな。それとゴツいライフル・・・そうだな、対戦車ライフルがいい」

「ちょっとお若いの、何しようってんだい？」

「お国のためにゴミ掃除さ、マダム」

ニカッと歯を見せた男とて三十路を少し過ぎた、決して若くはない。

彼はかつて戦場にいた。

必死に戦い、指揮下の小隊を一人も失うことなく本国へ帰還した。

気づけば英雄と呼ばれていた。

銃を捨てて家族を持った、幸せに暮らしていたある時、テロ組織を率いる男から勧誘を受け。

「冗談キツイよ旦那・・・こんな国に忠誠心なんざとつくにねえけど、ゴミと一緒に粹がる歳でもねえんでな」

それを、蹴った。

以来、彼はたった一人追われる者となった。

手に入れた全ては捨てた。

ダンボール一枚で浮浪者となろうと、英雄と呼ばれた心は戦士のままである。

「マダム、頼みがある」

「なんだい。弾薬ならサービスしとくけど」

「さすがだね。もう一声、金も出世払いで頼めねっかなあ？」

「チッ、しゃあないね。これ以上出世できるもんならしてみやがれ。・・・死んだらひっぱたくかね、英雄さんよ！」男は爆笑を残し、裏通りを飛び出した。

拳銃とライフルに弾を込めながら、思う。

のんびりと笑って夕食の支度をする妻、彼女に似て美しさを備えつつある幼い娘の顔がちらつく。

自らの部下は守った。

ならば、己の命は？

「ばーさんの応援じゃしょうがねえな・・・やっぱ生きて帰ろっと」

サーチライトが、彼を照らした。

「金髪ポニーテールだ！」

「黒髪ロングに決まってる！」

議論好きの連中と言うのは、何処にでもいるものでございまして。

何かにつけ持論を戦わせるのを生きがいのようにして、日々を過ごしているのです。

大概是結論が出ないのでありますが・・・。

「あのお嬢様の西洋的で快活な魅力！ ブロンドのポニーテイルこそ至宝！」

「大和撫子という言葉を知らんのか！？ かのご令嬢の楚々とした美しさ！」

本人たちの苦笑に気づきもせず、のんきなものでございます。

教室の窓から見える二つの影、密やかな話し声。

楽しげな様子を見ようと思えば見える、聞こうと思えば聞けるのですが。

憧れる者は、憧れの者に案外近づきたいものなのかもしれません。

「まったく、殿方というのは仕方ありませんわね」

「そう思うわ。却って健全な気もするけどね」

しかしこの二人のお嬢様、なかなか物好きな方々でございまして。

教室の中で展開する議論を聞いては、おしゃべりをされるのです。

いやはや、個人的には多少悪趣味にも思えますが・・・お嬢様方には悪意はないのでございます、たぶん。

「私のことで騒いでる彼・・・結構面白いのよね。無駄に熱いのよ言うことが」

「わたくしを褒めてくださっている方、ご存知？ いつもは取り澄まして図書室で本など読まれているのよ」

「おお、それはギャップありだねえ。イカスじゃん！」

「・・・うふふ」

金髪の快活なお嬢様がいぶかしげな顔をされました。

「どしたのよ」

「いえね。わたくしたちも、あの方々と同じ事をしている気がして」

「ああ！ 言われてみれば！」

指を指しあうのは行儀が悪いと互いの両親にうるさく言われていることなどかわりありません。

深窓の令嬢などという言葉からは程遠いほど庶民的であり、むしろ裕福な暮らしを疎んでいるお嬢様方には。

「趣味が合うようですから、いっそ突撃してみませんか？」

「いいねえ！ 聞いているだけとか見ているだけとか性分に合わないんだ」

黒髪のお嬢様は静かに微笑み、細い手を差し出します。

「どうせなら、議論をかく乱して差し上げましょ？」

「黒髪ポニーテールと金髪ストレート、か。のった！」

互にくすくすと笑いながら、髪紐を手に乗せあうお嬢様方。

「黒髪だ！」

「金髪だ！」

議論好きの連中と言うものは、どこにでもいるものでございまして。

「じゃあ、こんなのは」

「いかがでございますの？」

大変に悪戯好きなお嬢様も、稀有ながら、いらっしゃる様でございます。

コロッセオに剣戟が響く。

地鳴りの如き喚声を裂いて、ふたりの闘士の間、鋭く響き続ける。

王城近くの大聖堂、その鐘が鳴って早や一刻。

疲れを知らぬかのように剣舞を続ける二人に、観客は惜しむことない声援を送っている。

キン！

長剣を弾き飛ばし、一方が相手の間合いに飛び込む。

皮手袋に仕込んだ強化セラミックの爪を振るうより早く、銀の光が閃いた。

「あーっ！ ずるいッス！」

金色の瞳を獐猛に輝かせて、それでも半獣の娘は抗議の声を上げた。

「おや、何がずるいかな？」

こちらは純血の人間だろう、細身の体軀を髪と同じ紫の衣で覆った女戦士・・・否、その呼称では語弊がある。

「私は単純に、貴君の実力を認識し」

ローブに隠れて見えぬ小さな五指の先に巻きつけた鋼の糸を巡らせて己の周囲を覆いながら、幼い“人形師”は八重歯を見せて笑う。

「全力を以って戦いに挑んでいるのだが」

「その全力がずるすぎッス！ アンタ、さっきまで剣使ってたじゃないッスカ！ こっちに合わせる努力をすべきッス！」

「糸は我らの商売道具でもあるのだが」

「決闘はエンタメ、娯楽ッス！ 派手さとか目立つことが大事なんッスよ！」

「ふむ、一理あるな」

糸の風鳴りでは喚声にかき消されてしまう。

剣と剣、魔力と魔力のぶつかり合いほどの派手さなどは望むべくもない。

「客の要求をよく理解している。貴君は筋金入りの剣闘士、さて・・・この私は？」

人形師の全身が魔力の燐光に覆われ、その小さな手が天へと差し上げられ、そして数瞬の後。

悲鳴を上げて削り取られた石床が宙に固定され、砕けた破片さえ浮遊し。

コロッセオはさながら、サーカスの舞台の有様である。

「即席にしては上出来」

「加工料は山分けッスよね？」

「ふふふ、よかろう。私に一撃でも加えられたらの話だがな！」

空中の舞台に駆け上がり、幼いはずの人形師は凶暴な笑みを咲かせる。

「皮算用は不得手ッスよ！」

瞳をぎらつかせ、細かい跳躍を繰り返しながら、半猫の獣人も肉食の牙を剥いた。

この戦いの後、二人は世界で指折りの闘士兼興行師として名を馳せることになるのだが・・・。

それはまた別の話、である。

そいつは自分のことを異星人だと言った。

二週間ほど前突然姿を見せるや否や、だ。

『ま、それほど遠い星でもないがね』

むしろ近すぎて嫌になるほどの星から来た奴だ。太陽系第三惑星、唯一の衛星・・・その地下深くよりの来訪者。

「月だよ月っ！ 信じらんねえ、素直に地球に住め地球に！」

『私の家系を除いて…月の地下に巣を張った者たちは喧嘩っ早い。滅ぼされたいなら構わんぞ？』

「すみませんでした」

『素直でよろしい。それにしても幸福な男だぞ君は』

中性的な容姿を持つ異星人は、髪を梳きながら嫣然と微笑む。

『異星人とのファーストコンタクトを果たすだけでなく、日常をも過ごしている。将来は記念館ものだ、おめでとう』

「将来より今をなんとかしたいぜ・・・おまえ、できねえの？ 未来予測とかさあ」

『理論的には可能。光速を追い越す技術は、この第三惑星では確認していない。ゆえに理論は実証されない』

つまり、駄目って事ね。宝くじでも当ててくれたらと思ったのに。

楽はできんなど言って、月に住む者は笑う。静かだがこれはこいつの爆笑だ。

『ところで、同郷の者から連絡が来ている。そろそろ侵略を始めたいそうだが・・・どうする？』

「冗談じゃねえ！ オレは人生で何も成し遂げてねえんだ、勘弁してくれ！」

『自己主張・・・の姿をした母星への愛着。見過ごす事は出来んな、しかし故郷を裏切るわけにも行かん。さて』

腕を組んで座り込んでしまった。賭けのような気持ちで提案する。

「あのさあ・・・スポーツで解決できねえかな」

『理解困難。スポーツとは遊びのことか』

「厳密には違う。ルールの中で身体を動かして競うんだ」

『どんな種類がある』 「格闘技は悲惨なことになりそうだし・・・そうだ、野球が良い！」

『野球。理解困難、記憶野への干渉を許可願う』

「好きにしろ、説明の手間が省ける。野球関係の本なら棚にある、全部読め」

『了解した、ルールを把握し完全な形で同族に伝えたと宣誓しよう。この青い星・・・汚したくはない』
眠れ、という言葉が最後に、視界を闇が覆った。

数分後。

『野球、またはベースボールのルール及び付随する影響を把握。母星への送信を完了。うまく行くといいな』

「一応聞いとく、勝算は？」

『85.97%。確率の高い“ミラクル”だ。お前の勝ちだよ、おめでとう地球のヒーロー』

「むずがゆいから止せよ」

『そうだな。返信が来た、読み上げる。明日にでもチームを編成し乗り込むのであしからず』
椅子から転げ落ちそうになるが何とか回避。もうその気になったんかい！

『どうやら、野球の魅力と同族の喧嘩っ早さが合致したようだ。よかったな』

「おう。ありがとな」

『戦争は好かぬ、回避することは私の望みだった。礼を言うのはこちらだ』

笑みを浮かべた異星人の身体が発光する。眩さに目を閉じる。

『性別の固定を完了、衣装の選別を終了・・・目を開けていいぞ』

「！ おまえ・・・」

目の前には、蒼い長髪をなびかせる、青い目をした細身の少女が立っていた。

『色々と控えめな方が好みなのだろう』

「あっ、別の記憶も漁ったな！？ 性悪異星人！」

『ハハハ！ 減るものでもなし、いいじゃないか。そんなことより』

ひざを組んで迫力なく凄むオレの顔を覗き込み、平和主義の異星人はささやいた。

『私を野球へ連れてって』

「しかし、あれだねえ」

「どれだね？」

「人間の適応能力ってな、すさまじいやね」

「同意しておく。ぼくも5年足らずでここまで受け入れられるとは思わなかった」

・・・原因も由来もすべて不明のまま世界を震撼させた『メタモルフォーゼ現象』から既に五年。人々はようやくその現象の後の世界に慣れ始めている。

こと、ここ『旧ニホン国』においてはそれが顕著に現れていた。

それまでに醸成されていた文化の賜物か、恐ろしくも不可解なかの現象は軽い気持ちで受容され。今や日常になんら問題のないレベルとなっている。

「アキハバラの人間は特に訓練されている、見なよ」

野外の特設ステージでは美しい翼を持ったアイドル達が舞い歌い、大きな体躯をトドの毛皮（もちろん天然ものだ）で覆った追っかけ達が異様な盛り上がりを見せている。

時折野生のそれと聞き紛う咆哮が混ざるが、誰一人として気に留める者はいない。

「あれは何と言うグループなんだい？ 隠れオタクの少年よ」

「それを言うならきみだってゲーム・マニアだろうに。ま、可愛い笑顔に免じて問わずにおこう。

あれは今大人気の『イーグル・ファイブ』だ。よく見てみな、あの子らの羽」

狼の耳をぴんと立て、金と銀の目でステージを注視する。少女のヘテロクロミアは遠見の魔眼であった。

「鷹、大鷲、隼・・・なるほど、猛禽類」

「今度発売の格闘ゲームで主役の声優と主題歌をやるそうだ」

「あたしの知らない情報をどこから！？」

「ぼくの情報網を甘く見ないでくれたまえ」

少年は犬の耳を誇らしげに立ててみせる。

が、彼女はそれどころではない。早速携帯端末を起動させ、予約手続きを取った。

「やれやれ、動きがいちいち俊敏なのは狼の能力かねえ」

「多分ね」パチリと端末を閉じようとしたところに、メールが届いた。

「なにになに・・・ああ、まただよー」

絵文字をふんだんに使った文面を要約すると、

『本日夕方より『世の中これで委員会』を開催します。顔を出せ』

となる。差出人は彼女らの通う高校で一番の秀才兼お嬢様である風紀委員長だ。

メタモル現象で、やけに可愛らしい、もこふわの羊娘になってしまったのが未だに納得行かないらしい。

「あれはあれで可愛いのに・・・」

「真面目なんだろう、きっと。本題は10分くらいで終わっちゃうんだし、別にいいじゃないか」

「まあねー。でもここんどこ多いじゃん？ 遊びたいだけだったりすんのかな」

「そう思うなら、そうだな・・・きみの一番好きなゲームを持って行ってみるのはどうだい。

真面目な人間が見せるギャップってやつあ、結構萌えるんだぜ」

「萌えるか否かで行動を決めるなとあれほど・・・まあいいや、提案には乗るよ」

「フッフ、結局乗るんじゃないか。ツンデレさんだな」

「うっさい。さっさと行くわよ」

「痛い痛い、勘弁してよ。ぼくはか弱い小型犬なんだから」

歩きながらノートパソコンを操作するライオン頭のビジネスマンや自転車で疾走する豹頭の主婦とすれ違いつつ、二人は家路を急ぐ。

「世の中がこれでいいか、って？ いいに決まってるじゃないか。こんな狼さんと過ごせるんだからさ」
ずるずると引っ張られながら笑う少年の呟きは、もちろん少女には聞こえない……。

「肉じゃ！ 久々の肉じゃ！」

「慌てるな・・・よく炙」らないと駄目だ」

トリケラトプス、プテラノドン、ティラノサウルス。

そんな名を聞いて胸躍らせていたのはいつのことだろう。

「白菜の水炊きに電気がまで炊いたふっくら飯。お前さんの作る料理はなんでもうまいがな。

やはり私は恐竜の肉にしくはないと思うのじゃ」

「同感だな。気を遣うことなく食えるのはありがたい」

「そうじゃろ！ 肉は最高じゃてな！」

「ああ。さあ煮えた。今日はお前が食え」

粗末なテントの中、焚き火にかけた肉が煮える。

相棒の大好物、肉食竜の肉だ。

肉食系女子だなんて言葉がはやった時期もあったそうだが、こいつには敵うまい。

何せ、理想的に可愛い顔して主食は肉食種の肉ときてる。本物の肉食だ。

「いかんぞ、いかんいかん。私は分け合う心も学ばねばならん」

和やかな、実に和やかな夕餉である。

肉食恐竜たちが咆哮を上げ原始哺乳類や草食恐竜が闊歩する世界でなければ、もっと最高なんだがな。

「ほほほ、仕方がなかろう。仮想現実と現実がごっちゃになった世界なんじゃから」

2×××年、物好きな何者が引き起こした世界規模のサイバー・テロと不可思議な偶然により、当時社会現象となっていた仮想現実ゲームのプログラムが現実を侵食した。

そのゲームが問題であった。

ジュラ、白亜、新生代。

遙かな時空を繋ぎ再現した世界での冒険 MMORPG だったもんだからさあ大変。

政府やなんかの機関が東奔西走してくれたおかげで、どうにか恐竜の時代と現代の区分けがなされた世界になったが、いやはや迷惑な話である。

テロリストに感謝しまくりな連中も多いみたいだけどな・・・。

「うまいうまし！感謝じゃの」 「ああ。食事は二人以上に限る」

「うぬ！？ それは口説き文句か？」

「馬鹿」

頭をはたく。苦笑で済みますのがこいつらしいっちゃらしいが。

「私は当時の“萌えの理想”を象った者なんじゃけどの。一向お前さんの心をつかめぬのは何故じゃろうなあ」

「なんでだろうな…おっと、肉食種サマのお出ました！」巨大な足音と咆哮が響き、テントに影が写る。

「やれやれ、団欒を邪魔するとは・・・“竜喰ウ乙女”と知っての狼藉じゃろうなあ！？」

小さな体躯に似合わない巨大な槍を手にとって跳躍する相棒に合わせ、特注の拳銃に弾を込める。

「ゲームだか現実だかわかんねえけど・・・。生き延びさせてもらうぜ！」

終わらぬ遊びか人生か。

そんな問答はたくさんだ。

「明日も肉じゃ、肉が食えるぞ〜っ！」

ただ、明日の団欒が欲しいだけだ。

まっさらのスケッチブックに、鉛筆が走る。時に素早く、時に慎重に。

黒の濃淡のみで、絵が表現されていく。

・・・のを、あたしは正面から見てる。

「ねえー、ちょっと休憩にしようよ！ お腹すいた！」

ちょっぴり拗ねた声で、繊細な手の持ち主に呼びかける。

「いいところだったのに、しょうがないな」

彼はそんなふうには吐息して椅子から立ち上がると、あたしの方に近づいてきた。

「それでは、エレガントにランチとしゃれ込みましょうか、お嬢さん？」

「ウチの学食に優雅も風雅もあるもんですかいな」

それを言っちゃあおしまいさ。

彼は笑い、あたしの手を、少しためらってから取った。

いつまでもシャイな人である。

・・・・・・高校二年生になってすぐ、通算で何回目かのクラス替えで、あたしと彼はお隣さんになった。

今まで関わったことはほとんど無くて・・・絵のモデルを頼まれたときは驚いたものだ。

隣で過ごして半年以上経っていたから彼の人となりや性格など、長所も短所も把握できていた。

だから、軽い気持ちでモデル役を買って出た。

自宅のアトリエに案内されたとき、あたしは更に驚いた。

居並ぶ絵も相当なものだったがすべて白黒で描かれていて。そこそこに転がるのはおびただしい数の鉛筆、黒のボールペン、筆ペン、エトセトラ。

「色覚異常なんだ、ぼくは」

淡々と、それを受容し切り活かそうとする者の声で、彼は言った。

「生まれつきだからね、慣れてるんだ。悲しんだりひがんだりするより、出来る事を探したほうが楽しいだろう？」

あたしは、全く気づかなかったことを少しだけ恥じ（それ以上の感慨は何故か浮かんでこなかった）、それ以来真剣にモデルを務めている。

車の宣伝をする女優みたいな笑顔になってみたり、それこそお嬢さんみたいにすまし顔をしてみたり。

それを、彼は嬉しげに写し取っていた、と思う。

「ちょっとだけね、残念なことがあるんだよ」

「ん？」

「このトマトの情熱的な赤が。レタスの上品な緑が。ハンバーグの美味そうな肉色が」

ぼくには、分からない。そう言ってから、テイクアウトのハンバーガーに思い切りかじりつく。

「そうね。でも、一色で充分じゃない？」

あなたの絵のように。

「その味がハンバーガーの色。赤も、肉の色も、緑も、黄色も、上手に混ぜて、おいしい色になる」

世の中考え次第よ。そう言うと、「なるほどね」とひざを打つ。

そのしぐさが、結構好きだったりする。

「・・・赤だけの味が知りたいなら、今すぐ教えられるけど？」

それは今度にするよ、と少し慌てて言う。

本当に、いつまでもシャイなひとだ。

どうも偉い人の考えることは分からない。

偉大なる、という形容詞をつけてもよい科学者が居る。

誰も及ばぬ突飛な発想力を持ち、あらゆる努力と時間と私財と天才的な閃きでそれらを実現し。

ある意味で大きな足跡を残した科学者が居る。

私の爺さんである。

「おお、やっぱりおぼこいのう！」

「爺さん。それって『ナゴヤコトバ』だろ？ 分かりづらいよ」

爺さん、などと呼ばせてはいるが・・・実質、私を作り出した人である。

「そうかのう」

「そうだよ。子供らしくて可愛いって言ってくれなくちゃさ」

黒髪を結び飾る愛らしいシュシュに触れながら、私は文句ばかり言う。

完全な自律回路に飽き足らず、人間の脳を参考に作り上げられた“ノーサイボー・プログラム”を搭載し・・・。いつも思うのだが、もう少しマシな命名は出来なかったのだろうか。

さておき、そのプログラムによって思考し感情を持ち、こんな風に製作者に文句を言うアンドロイドを開発した人として、爺さんは有名なのである。

「『ヤマトナデシコ』ってえの？ それ目指してたんだろ」

「おう、そうだよ。事実外見は完全なる大和撫子だわいな」

鏡を見せられるけれど、そんな実感はないなあ。

客観的に己を見してみる。清楚と言えなくもない顔立ちだ。

黒髪を背中まで伸ばし、薄く化粧を施した肌。夜の闇より深い色の目は水晶のごとく（分子構造的には近いらしい）輝き、薄紅の口紅もなかなか似合いである。

はすっぱで考えなしでガサツな性格を除けばまあ、爺さんの目指した女の子に近いんだろうなあ。

「外見と性格に不一致があってこそその魅力、というのもあるんじゃないよ」

「へいへい、分かりやしたよ。・・・っと、敵性ロボットの反応ありでっせ」

「面倒かけるが、いつものように頼むよ」

卓抜した発想と技術を持つ爺さんは、いくつかのテロ組織に狙われてる。私は彼の“孫”であると同時に、優秀で優秀な警護者でもあるってわけだ。

爺さんの趣味で得物はレトロなフルオート・マグナムとタングステン鋼のカタナなんだけどね。

「たまにはロケットランチャーとかレーザー砲とか撃ってみてえんだけど」

悪趣味なデザインのロボット軍団に向け、マグナムを連射する。対兵器用の徹甲弾が意思を持たぬ敵を打ち砕く。

なおも迫るのをカタナで駆逐していく。

「ホント、今時こんな戦闘スタイルなのって私くらいのもんだぜ。偉い人の考えることは分からねえよなあ」

分かってはいるのである。

笑顔でマグナムをリロードしている時点で、大和撫子への道は遠い。

世の中って不思議だな、と思う。

「爺さん、本気か？」

「狂気の科学者になるつもりはないよ。本気さ」

私こと、天才科学者の“孫”兼ボディガードなアンドロイドを連れて旅行に行くと言い出したうちの爺さん。突飛な発想と確かな技術力で偉大な足跡を残してきた彼は、時折妙なことを言っは私を困らせる。自律思考回路がうなりを上げ、我が“ノーサイボー”があらゆる事態を想定して予測をはじき出す。

「・・・ま、爺さん孝行はしとかないとな。アマゾンまで追ってくるバカはいねえだろ」

「そうこせなくっちゃのう！ 早速行くぞな」

実に味気ない旅路であった。爺さん謹製のモンスター・カーに乗ること数分。

目的地であるアマゾン川流域の小規模都市にたどりついてしまったのだから。

「私の予測した事態はまるで起きずですかい・・・」

「ほっほっほ、孫の予測の斜め上を行けぬようではのう！ さ、膨れとらんで警護しとくれよ」
釈然としないものを抱えながらも、優秀な私は任務を遂行すべく爺さんの背中を追う。

現地で雇ったガイドを伴って密林を進み、とあるバットケイブー要は薄暗い洞窟だ一に到着した。別に道中を端折りたかったわけじゃないんだからね。

「誰にツンデレ言葉を使っとるんじゃ」

「ま、いいじゃん。ところでこんなところに何の用が？」

「ここはの一。わしのガールフレンドが居る場所なのよ」

「こんな洞窟に。変な彼女さんだあね」

大笑いした爺さんは、壁面のスイッチを押した。

見よ、コウモリが出てきそうなかび臭い洞窟の壁面は機械的な輝きで覆われ・・・宮殿内部のごとききらびやかな玄室と変わり果てた！

「これは・・・治癒用カプセル。浮いてるのが彼女さんだよな？」

「正確には嫁さんじゃ。身体がどんどん若返ってしまう奇病での。

薬を作れるまで、ここで眠ってもらうよりなかったんじゃ」

「・・・爺さん」

爺さんにとって、ここは要塞なんだ。病気から、テロ組織から、全てから妻を守るための、孤独の要塞。

「時間がかかってしもうた。こんなに老けた。だが、やっと連れて帰れるよ」

愛しい女性を閉じ込めたカプセルのパスワードを入力していく製作者に背を向け、私は玄室を出た。

「バカどもが。こんなとこまで来やがって！」

悪趣味なデザインのロボをののしってマグナムを抜き、感情に任せて引き金を引く。

爺さん、何でだ。

何で私に感情なんて持たせたんだ。畜生、視界が歪んで的も絞れねえ！

一発で倒せない頑丈な奴へ連射を浴びせ、銃を捨てて刀で切りかかる。

タングステンと質の悪い金属がぶつかり火花を散らし、紙のように斬れる。

飛び散るオイル、鉄くずとなって停止する敵。戦いをつまらないと思ったのは初めてだ。

「うちの爺さんはな、手前らと違って忙しいんだ！ 私が相手してやんよ！」

和服を模した清楚な服の裾を翻し、髪を振り乱して跳躍し銃弾の雨を降らせ。疾走して牙のごとく刀を振

るい。

獅子と化して任務を遂行する。

守るのがこんなに嬉しいと思ったのも初めてだよ。爺さん、ちっちゃい婆さん。

不意に洞窟が揺れた。玄室の壁がブチ破られ、例のモンスター・カーが現れる。

「待たせたのう！ 帰るぞ！」

「へいよー！」

助手席に10代後半のちっちゃい婆さんを乗せた爺さんの声に従い、分厚い天井に飛び乗る。銃を乱射し刀を奮って道を切り開き、崩れ去る要塞を後にした。

数日後。

「おかしいのう。ばあさんが一向に変化ないぞ。薬で劇的に成長して、わしと同じくらいになるはずなのに」

「は？ じゃ、じゃあ、このまんま！？」

そうなる、と頷いた爺さんの隣には、二十代前半の若々しく美しい婆さんがいて。

玉露の入った湯飲みをすすり、こうのたまうのである。

「だんなの予測の斜め上を行けないようではねえ」

世の中とはとかく不思議なものである。

あとがき、または言い訳

ここまで読んでくださった心優しい読者様、初めまして。

不肖わたくし、閑古鳥あくたと申します。

小説家を志しつつ何にもなれていない、筆名どおり「あくた」のように生きている何者かです。

持病は胃腸炎と金欠病、極め付きには中二病・・・というイタイヤツでして。

・・・えーと。

この本は、某ソーシャルネットワークにて書き溜めた掌編を集めたものです。

基本的に一話完結のお手軽ストーリーですが、No9 と No10 のお話のみ続き物となっております。

よくない（何に？）言い方をすれば、『プロット集』とでも申しましょうか・・・。

一編一編にもっと要素を詰め込んで長編にするんだ・・・という野望を抱えつつもその達成は危うく。

『とにかく読んでいただきたい！』

という想いが命じるまま、電子書籍作成に踏み切ったのでございます。

見切り発車もええとこ、という気もしますが。

上手でない筆運び、偏ったお話たちではありますが、皆様のお時間を拝借するに足る話が一編でもあることを祈りつつ、乱文を締めたいと思います。

お読みいただき、ありがとうございました。